

さる一月中旬、中国では懸案の全国人民代表大会が十年ぶりに開催され、新憲法、国務院の新しい陣容などが発表されて注目を集めた。

今回の新しい国家指導体制の性格を簡潔に表現するなら、それは、「毛沢東以後」の時代への移行期にふさわしい実務型官僚体制の新たな再編成であったといえよう。中国はいま、最大の国家目標である経済建設の進展に向かって全力を集中しようとしており、それは同時に、国民民衆の強い要求に根ざすものでもあるので、

●外交時評

中国の新体制と北京の表情

中嶋嶺雄(東京外国語大学助教授)



あるが、毛主席の高齢に伴う行政的・実務的指導能力の当然の低下にもかかわらず、そのカリスマ的権威は依然強大であり、形の上でも、党主席としてのすべての権力が集中するようになったのであるから、むしろ毛主席の行政的指導力の低下を補てんしつつ、「毛沢東以後」の時代への移行にそなえようとした体制が、ここによくやく確立したとみるべきであろう。

全人代閉会後に、鄧小平が軍・総参謀長に、張春橋が軍・総政治部主任に就任したことが明

そのためにも実務型の国家指導体制が要請されたであろう。周恩来総理以下、鄧小平、張春橋といった実務能力にすぐれた指導者がクロージアップされ、王洪文、江青、姚文元、李德生、汪東興らの文革イデオログなしい急進派が、党の一元化指導が強調されたにもかかわらず、新しい国家体制のなかにまったく位置を占めなかつたことは、このことを物語っている。毛沢東主席が全人代に出席しなかつたことを含め、これら文革急進派の退潮は毛主席の権威低下を意味するのではないかとこの見方も一部に

らかになつたが、このことは、葉劍英の国防部長就任とともに、林彪事件の教訓を学んで、党・軍・政の一元化を行政・実務面からもすすめるようとするものであろう。

私はまたまた、去る一月八日から十四日までの一週間中国に滞在し、八年ぶりに北京を訪れて、全国人民代表大会の開催が間近であることを実感するとともに、北京の様子が大きく変化していることに驚いた。今回は、モスクワからウランバートル経由、汽車で中国へ入境するという例外的な旅程であり、八年前の北京は文化大革命

命の高揚期ですべてが騒然としていたために、今回の印象は対照面がより明白なのかもしれないが、北京の表情は平穏そのものであり、すべてが正常化して、「批林批孔」運動の高揚などはまったく感じられず、そのような学習風景にも出会うことなく、かえって「脱政治」的なふん囲気のみ強く感じられたのである。

一方、この八年間に、経済の前進は着実であり、市場の品物も豊富になっていて、「八億の人民の衣食にたいする基本的需要が保証された」という周恩来総理の政府活動報告の指摘はこれを十分に実感することができた。問題は住であり、また、国民経済全体の水準の向上であり、工業化の発展である。この点にかんしては、中国がまだまだ大きく遅れていること、まさに発展途上国であることは、北京の目抜き通りを歩入った胡同や盛り場をたちどころに実感できる。

だから、西ドイツの「デイ・ウェルト」紙がいうように、北京の労働者は「批林批孔よりも労働条件の改善を求めている」のかもしれないが、いずれにせよ、中国では政治よりも経済の時代が着実に開幕しているように思われ、今回の新しい国家体制は、そのような時代の要請にこたえようとするものであつたといえよう。少なくとも「毛沢東以後」の時代への移行期については、この新しい体制がそれを担ってゆくように思われる。